

〔圖評に及びしゆ及、兩村云、あはせて此事を止げるとぞ、〕

青藤山人路志引大明一統志曰、拔河之戲、湖廣歸州俗、以麻緝巨竹、分明而挽、謂之拔河、以定勝負、而祈農桑、

拔河の事、五雜組にも見えたり、

綱曳や左の利し大男

宇月

吾妻橋

〔淺草志〕大川橋。竹町渡しより北の方、雷神門前通り、本所中郷より渡る、橋長八十間餘、或は七十八間共いふ、安永三年冬初而かゝる也、

〔御府内備考〕十三大川橋

淺草志云、大川橋は花川戸町より本所中の郷へわたす、長八十四間、幅三間半、行桁二十三、橋杭八十四、掛渡しの發起は花川戸町伊右衛門といふもの也、其子五郎右衛門相續て請負人と定む、五郎右衛門が記したる覺書左のごとし、

橋新規掛渡し之儀、初て明和六丑年四月九日、依田豊前守様御番所江御願申上置候、同八年八月、中御役替ニ付、曲淵甲斐守様御番所江御願申上、追々御糺之上、安永三年五月五日、橋新規掛渡し、松平右近將監様御差圖に而被仰付、同年十月十七日皆出來、御見分相濟、同日往來渡り初之事、

但大和國老人渡り初抔と申事、一向無之候、

大川橋と申御高札被下置候

但東橋と申義は、世上にて掛渡し迄之間之風説いたし候事、

〔塵塚談〕下淺草大川橋俗に云吾妻橋、明和九辰年二月晦日、目黒行人坂より出火し、江戸三分一も焼亡す、其節は此橋なし、一筋道にして、眞崎千住をさして逃たり、故に老人小兒は歩行思ひもよらず押